

県研究主題

心と体を一体としてとらえ、生徒一人ひとりが生涯にわたって運動に親しみ、自らの健康・体力づくりを考えて行動する資質や能力を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 竹中 太一（相模原地区）

<研究主題>

保健体育科における自己有用感とコミュニケーション力を高めるための授業づくり
— 柔道を中心に言語活動の充実を意識して —

1 提案内容

聞く・伝えるというコミュニケーション力を高め、お互いの意思疎通を円滑に図ることで、自己有用感を高めさせたい。また、昨年度の「学習状況アンケート」では、4人グループの活動などで、自分の意見を伝えただけで満足してしまい、実際には話合いの内容が深められていないという結果も出た。そのことも受け、言語活動を充実させることにも取り組み、研究を進めていくこととする。

(1) 自己有用感

自己有用感とは、集団の中で自分が大切な存在であるということを認識することである。自己有用感を高めることで、消極的な部分を改善し、一歩前に出る勇気を育むことができる。

① コミュニケーション

自己有用感を高めるためには、相手の話を聴き、自分の話を聴いてもらうというコミュニケーションを取ることが大切である。その中に質の高い言語活動が伴うことで、自己有用感はさらに高まっていく。

(2) 柔道を中心に自己有用感を高める

コミュニケーションを取るためには、声を出せる雰囲気・環境・習慣づくりが必要である。そのために年間を通して、整列や準備運動、応援や伝える声を出すように指導した。その結果、言葉によるコミュニケーションは取れるようになってきた。

① 単元に合った体づくり運動

メトロノーム・人間丸太というように体に触れ合う動きを取り入れることで、柔道に対して前向きに活動する雰囲気を作り、ただ投げる・投げられる、痛いなどの恐怖心や偏見を取り除いた。

② 伝統的な考え方や動き

礼法や受け身・固め技などを儀式的、形式的に行うのではなくグループで考え、発表する。

③ 体育指導協力者の協力

体育指導協力者が、安全対策やより専門的な内容を指導することで、柔道経験者でない教員に不安を覚える保護者への安心感や、生徒のより深い学びにつなげる。

また、指導協力者が実際に生徒に投げ技をかける様子を観察し、投げ技の判定の学習をした。専門家でも判定がわかる場合があり、生徒が判定することは難しい。しかし、学んだことやもっている知識、仲間の考え方を自分の考えと組み合わせながら、思考し、答えを導き出し、自分なりの考えを発表するという学びができた。

(3) 成果と課題

コミュニケーションを取るために、声を出せる雰囲気・環境・習慣づくりをすることで、消極的な生徒も積極的に声が出せるようになった。また、柔道に対して否定的な考えをもっていた生徒も前向きな姿勢で取り組めるようになった。年間を通じた取組により、グループの雰囲気が明るくなり、意見も出しやすくなった。その結果、学習した知識や経験を生かしたそれぞれの思考から、仲間とともに学びを深めることができた。

課題として、柔道の単元では、男子同士、女子同士で話し合い活動を行ってきたが、同性同士の場合、活動が停滞したり、すぐに答えが出てしまったりすることがあった。また、一人の生徒の考えだけで話し合いが進んでしまったり、それぞれの学びが深められなかったりする場面も見られた。今後は、生徒がグループで話し合わなくてはならないような、やや難易度を上げた課題の設定をし、男女混合にして話し合わせる場面も多く作りたい。普段の授業から、性別、体力差や技能差に関係なく、多様な人と話し合うことで新たな思考が生まれ、生徒の学びが深められていくことを期待する。

2 協議内容

(1) 提案者の発表を聞いての感想

① 生徒主体の授業展開

教員が指示を出すのではなく、ホワイトボードで本時の活動内容を掲示することで生徒同士が声を掛け合って活動し、コミュニケーション力の向上につながる。

② コミュニケーションと運動量

コミュニケーションの時間を取ると運動量が減り、生徒の満足感は低くなる可能性がある。しかし、保健体育だけでなくすべての授業で話し合いの場面をもち、その意味を説明し理解することで、運動技能が高まることを体験させると満足感は得られる。

3 まとめ

(1) 投げ技の不安

学習指導要領解説に「相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わう」とある。生徒が安全に取り組めるよう、できる範囲の中で投げ技を指導する。そのために、伝統的な考えである“礼”を重視し、相手を尊重することが安全面へとつながることも指導する。また、受け身は、投げられたときに上手に転ぶことが重要である。上手に転ぶことができれば投げ技に入っていける。投げ技は、不安感を取り除くために低い姿勢から行い、しっかり受け身を取る。これだけでも生徒は、できたという有用感を得られる。

(2) 運動量の確保

運動量については、受け身や抑え込みの条件を教員が指導し、グループで考えさせ発表させるという場面を設定することで、生徒は話し合いながら運動量を確保することができる。

(3) 安全面の配慮

安全面では、絶対にしてはいけないことや、やらなければいけないことを確認する。また、投げる方向や組手を統一し、受け身の方向を同じにした。

＜研究主題＞

生徒の主体性をはぐくむ授業展開の創意工夫について

— 体育理論授業でのグループワークの効果的な活用 —

1 提案内容

課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うためのアクティブ・ラーニングを取り入れた体育理論の授業実践である。

(1) 運動やスポーツの必要性和楽しさ

ワークシートでスポーツの始まりに関する絵を見て、どんなスポーツとかがわりがあるかを考える。その後、グループで知っているスポーツを数多くあげ、「必要性」「多様な楽しみ」について分類し、理由とともに発表する。

(2) 運動やスポーツへの多様なかかわり方

身近な神奈川のスポーツである「湘南国際マラソン」に関する数種類の写真を見て、そこにかかわっている人たちをあげる。その内容を「行う」「見る」「支える」「その他」に分類し、グループごとに発表する。その中の「支える」の役割について考え、理解を深める。

(3) 運動やスポーツの学び方

学習時にオリンピック予選大会で開催中であったバレーボールを題材とし、知っている言葉を個人で付箋に記入し、次にグループで分類シートにまとめる。まとめた言葉を技術、戦術、ルール、ポジション、その他に分類し、「三段攻撃」を成功させるための練習方法をグループで話し合い、スポーツをより効果的に学ぶ方法を考える。

2 協議内容

(1) 質疑・感想等

- ・グループワークをする際、グループの人数や言語活動が活発になるような工夫をされているか。
- ・体育理論で学んだことを実技に生かしていく工夫が必要である。
- ・グループワークをする上で、支援を要する生徒に対する工夫はどのようにされているのか。
- ・プレゼンテーションという形で、自分の知らないスポーツを紹介する方法もある。
- ・グループ活動を行う上で決まりごとなどがあるのか。
- ・秦野市では研究協議の機会をどのくらい設定したのか。

(2) 全体協議 協議の柱 「年間を通した協働的な学びを充実させる取組の工夫」

- ・授業規律を1年生から継続的に行っていくことが大切である。
- ・小中の連携を深め、情報交換を密に行う環境を作ることが重要である。
- ・学校の状況に合わせ、何を教えていくかを明確にしていく必要がある。
- ・教員同士が情報交換を密にし、研究などで意見交換し、教員自身が協働的な学びをしていく必要があるのではないだろうか。
- ・まず、日ごろの授業をしっかりと取り組んでいく必要がある。役割分担を明確にした授業をしていくと協働的な学びにつながる。
- ・取り組む内容をルーティン化していくことで、さまざまな生徒が入り込みやすい授業展開になる。

- ・見合う、教え合うことで課題解決方法を考えていくことが言語活動につながり、協働的な学びにつながるのではないかと。
- ・運動量の確保を充実させながらできる喜びを体感することが、生涯スポーツにもつながるのではないかと。
- ・視聴覚教材を利用することが、見合うことを容易にし、学び合うことにつながりやすい。

3 まとめ

体育理論について

- ・各市町村全体で同じ目的で同じ方向を向きながら研究を進めていくことは、さまざまな発見につながり、生徒の意欲につながる。
- ・グループピングをする際の人数構成は4～5人が適当である。
- ・付箋に記入しカテゴリー化していくことは非常に取り組みやすい。中でも魚のかたちにして行うフィッシュボーン法は取り組みやすい。
- ・アクティブ・ラーニングを実現するために、話し合い活動は大変効果的であるが、活動自体が目的にならないように配慮する必要がある。話し合い活動を手段として何を身に付けるのかを明確にすることが重要である。
- ・アクティブ・ラーニングの究極は、プレゼンテーションである。プレゼンテーションすることで、質疑応答が行われる。「なぜ」「どうして」の疑問が学び合いになる。
- ・理論に基づく実践がない限りは、学習指導要領にそったものにはならないし、技能の定着につながらない。また、理論と動きのイメージがマッチしないと技能の定着につながらない。
- ・「支える」という行為が、自分は役に立っていると前向きに取り組もうとする態度につながるのではないかと。
- ・体育理論の3時間は、学年の初頭に行うと効率的で効果的になるのではないかと。